

第 213 回地質調査所研究発表会講演要旨*

特集 「地球温暖化問題」へのアプローチ

地球温暖化の基本的な対策方針として、「地球再生計画」や「地球温暖化防止行動計画」などが提起されてきた。これら計画の目標達成に、地質調査所はどのような地球環境観から取り組んでいるかを、具体的な調査研究事例から報告した。講演内容は地質ニュース（1991年9月号、no. 445）に掲載されているので、プログラムを紹介する。

通産省における地球環境問題への取り組み

富田育男

通産省はヒューストン・サミットで提起した「地球再生計画」に基づき、地球環境問題についての具体的行動として「地球環境技術開発研究」を実施している。また、国際的な研究機関としての（財）地球環境産業技術研究機構を整備している。これら計画の基本的理念としての「地球再生計画」について解説すると共に、今後の研究動向について展望する。

（工業技術院地球環境技術企画官）

地質調査所における地球環境問題への取り組み

小川克郎

地質調査所では、鉱物資源開発の基礎研究から再生可能な地球環境資源の評価へと、その研究対象を広げつつある。これらの研究課題を地球システムの時間-空間軸に位置付け、各システムの過去-現在-未来へのプロセス解明課題として展望する。

（地質調査所長）

第四紀の気候変動の原因

米倉伸之

人類の時代とも云われる第四紀は、地球の気候史から見ると寒冷な氷河時代で特徴付けられる。周期的な氷期・間氷期の気候変動や海面変動は、生物の生息環境に

大きな影響を与えてきた。この気候変動についての現在の知見を基に、地球環境は何処に向かっているのかを展望する。

（東京大学理学部）

外洋域における物質循環のメカニズム

川幡穂高

地球的規模での環境問題に対しての海洋の役割については、未だ解明されていない事が多い。当所では平成2年度から8年計画で、太平洋における物質循環の調査研究を開始した。この研究の目的と予想される成果の意義について解説する。

（海洋地質部）

PAGES（過去の気候変動の研究計画）

松本英二

IGBP（国際地球圏-生物圏研究計画）のコアプロジェクトとして PAGES が1991年から開始される。「現在の気候条件がどのようにして形成されてきたかが解明された時、初めて、将来の気候変動の予測が可能となる」。極地の氷床コア、樹木やサンゴの成長年輪を研究材料として、国際的な古気候復元研究に我が国は如何に取り組もうとしているかを報告する。

（名古屋大学水圏科学研究所）

サンゴ礁における二酸化炭素固定能力

茅根 創

美しい自然の景観を構成するサンゴ礁は、自然の二酸化炭素固定工場としても注目されている。人と自然に優

*平成3年9月13日 東京、石垣記念ホールにおいて開催
主催 工業技術院地質調査所、（財）日本産業技術振興協会

しい科学技術開発の進むべき方向の一つとして、サンゴ礁での物質収支を、生態系のプロセス及び地形発達に注目して評価する手法について解説する。

(海洋地質部)

環境変動の影響量評価とその対策

大嶋和雄

日本列島の動植物相の地理的分布は、第四紀の気候変動や海水準変動に対応しながら形成されてきた。この環境変動の中で生き残ってきた生物群の生息環境の変遷から、環境変動量の幅を定量化する。さらに、この環境変動を積極的に利用するには、如何にすべきかを提言する。

(首席研究官)